

古英詩『創世記 B』における頭韻語の選択

藤 原 保 明

はじめに

古英詩『創世記 B』(*Genesis B*)の韻律はこれまで Sievers (1887)以降の伝統的韻律論の枠組みにおいても十分な分析がなされてこなかった。もっとも、この枠組みは必ずしもゲルマン諸語の言語特性に基づいて設定されたものではなく、頭韻の機能や分布上の特徴を捉えることができず、言語のリズムの本質からかけ離れた分析を行うなど、妥当性に欠ける。そこで、本稿では古英詩『創世記 B』に焦点を当て、観察が容易で客観的に判断できる頭韻を分析対象とし、韻律の基本となる事実を抽出することによって古英詩の言語特性を解明したい。今回『創世記 B』を分析対象としたのは、『創世記 A』およびサクソン語の原典と比較ができること、『創世記 B』に多く用いられている韻律過多の半行に新たな韻律解釈を施す可能性があること、宗教詩と叙事詩というジャンルの区別に対応した語法や韻律上の相違を指摘できる可能性があることなど、韻律を含む古英詩の言語研究に新たな光を当てられる期待が大きいからである。

I. 『創世記 B』の単一頭韻半行における頭韻語の選択

1. 1. 頭韻階級の原則

ゲルマン古詩では半行中の複数の語から頭韻語が選択される場合、(1)に示した「頭韻階級の原則」に従う。この原則はいくつものゲルマン古詩に適用され、その妥当性と普遍性が証明されてきた (cf. 藤原 1990:209-285)。しかし、この原則は『創世記 B』には適用されていないことから、本稿では(1)の原則に基づいてこの詩を分析し、その結果を言語学的に考察したい。

(1) 頭韻階級の原則

(a) 古英語の語彙は頭韻上4つの類に大別される。

(i) 1類…名詞、形容詞、派生副詞

(ii) 2類…本来語の副詞の一部

- (iii) 3 類…動詞 { 1 類…非定形
2 類…定形(ただし、助動詞は除く)

(iv) 4 類…機能語、本来語の副詞の一部、助動詞

(b) 類の異なる複数の語が同一の半行中で共起する場合、頭韻に加わるのはより上位の類(1 類→4 類の順に下る)に属する類の語である。

(c) 同じ類に属する複数の語が同一半行中で共起する場合、頭韻に加わるのはより左に位置する語である。

(d) 二重頭韻の場合、頭韻語の一つは (a) ~ (c) の原則に従わなくともよい。ただし、この語は 1 ~ 3 類の語に属し、第一半行の最も左寄りに位置しなくてはならない。

1. 2. 『創世記 B』の第一半行における単一頭韻の分析

この種の半行において最も頻度が高いのは名詞と形容詞が共起する場合と動詞(とりわけ定形)と名詞(または形容詞)が共起する場合であり、『創世記 B』ではいずれも 55 例用いられている。動詞の定形と非定形が共起する 17 例がこれに次ぐが、その他はいずれも少数に限られている。このうち、動詞の非定形と定形の語順については、定形+非定形とこの逆の語順である非定形+定形はほぼ 2 対 1 の割合(11 例と 6 例)で生じていて、後述する第二半行での割合との比較が興味深い。

最初に、名詞または形容詞が用いられている(2)のような半行では、(1b)に忠実に従い、名詞または形容詞が優先的に頭韻語として選ばれている。なお、本稿では、頭韻に関与する頭子音は斜字体で記し、一般に母音の頭韻と呼ばれているものについては声門閉鎖音の実現とみなし、*ʔ*で表記し、名詞は N、形容詞は A、副詞は Adv、動詞の定形は +F、非定形は -F、前置詞は Prep、代名詞は Pro、所有代名詞は PPro、不定詞は inf、過去分詞は pp、数詞は Num で表す。

(2)(a) *ac wende þæt hēo hylde* (712) 'but she thought that she (was gaining)

+F N

the favor'

(b) *and mid his handum gescēop* (251) 'and grasped (them) with His hands'

N +F

(c) *cwæð sē hēhsta* (344) 'he said that the highest'

+F A

(d) Ac wit þus baru ne magon (838) 'But we cannot (be) both thus naked'

A +F

(e) būgan him swilces geongordōmes? (283) 'bow before Him with such

-F N

allegiance?'

(f) his bebodu healdan (526) 'keep His commandments'

N -F

(g) habban him tō wæron (475) 'have truly to him'

-F A

ちなみに、(3) の 2 例は (1b) の原則を逸脱しているが、他の古英詩においても (1b) が破られる例は皆無ではないことから、この詩では原則 (1) がかなり忠実に守られていると結論を下してよい。

(3)(a) sēcan þonne landa (487) 'then seek (the darkest) of lands'

-F(inf) N

(b) Sæge Ādame (617) 'Tell Adam'

+F N

一方、(1c) によると、名詞と形容詞が共起する (4) のような半行では、より左に位置する語に頭韻の権利が与えられる。『創世記 B』の場合、すべての例がこの原則に従っていることから、(1c) は完全に確立した原則となっていることが分かる。なお、強勢語が半行中に 3 つ用いられている (4e) のような例は、伝統的韻律論においては拡大半行と呼ばれ、特殊な韻律解釈を施されているが、頭韻語の選択に関する限り全く原則どおりの半行である。ただし、単一頭韻の第一半行の場合、『創世記 B』にはこの種の例は他にはない。ちなみに、(4e) では heofnum と helle の頭子音が一致しているが、二重頭韻ではなく、頭韻はあくまでも最左端の englas の頭子音 [ɣ] に実現している。このことは、対応する第二半行の and hēo ealle forscēop 'and transformed them all' から確認できる。なお、この hēo 'them' は人称代名詞であることから一般に頭韻することはないが、仮に頭韻に関与していると解釈すると、第一半行の heofnum と hell が頭韻することになり、englas は (1c) に反して頭韻しない例外的な半行となり、きわめて不自然な解釈を下すことになるため、本稿ではこの解釈は採用しない。

(4)(a) ÆEue sēo gōde (612) 'Good Eve'

N A

- (b)
- heardes īrenes*
- (383) 'hard iron'

A N

- (c)
- dim and þystre*
- (478) 'gloomy and dark'

A A

- (d)
- þæt hē mægen and cræft*
- (269) 'that he (had) strength and skill'

N N

- (e)
- þā ƿenglas of heofnum on helle*
- (308) 'then the angels (fell) from

N N N

heaven into hell'

次に、副詞間の階級の相違については該当例が(5)の3例に限られることから決定的なことは言えない。しかし、副詞間の頭韻階級の相違は副詞が多く用いられている第二半行の分析の参考となりうることから、若干の考察をしておく必要がある。すなわち、ここでは *þonne* 'then' のような接続副詞 (Conjunct)、*swā* や *ful* のように強意の副詞 (Emphatic Adverb) はいずれも頭韻階級上派生副詞より劣位にあるとみなしておく。

- (5)(a)
- þū meaht his þonne rūme*
- (561) 'then you may fully (consider) ... him'

Adv Adv

- (b)
- þat hēo swā wīde*
- (608) 'so that she so widely'

Adv Adv

- (c)
- ful þiclice*
- (705) 'very often'

Adv Adv

一方、機能よりも内容に力点のある2つの副詞が共起している(6)のような場合、2つの副詞は同一階級にあることから、(1c)に従って左に位置する副詞に頭韻の優先権が与えられる。

- (6)(a)
- þæt hē west and norð*
- (275) 'that he westwards and northwards'

Adv Adv

- (b)
- þæt hē ƿup heonon*
- (415) 'so that he up from here'

Adv Adv

- (c)
- sūðan oððe norðan*
- (807) 'from south or north'

Adv Adv

単一頭韻の第一半行の場合、1. 4. で分析する第二半行の場合とは大きく異なり、副詞と動詞が共起する例は(7)にあげたわずか7例に限られるが、これらの例は副詞と動詞の頭韻上の優劣を知る上では貴重である。これらの副

詞は、7 例中 6 例 (7a~f) において動詞の非定形、定形、助動詞の区別なく、動詞より優位にある。これは、副詞がいずれも派生副詞またはそれに準じた内容語であることに基づくようである。なお、(7g) は例外とみなす以外に解釈の余地はない。

(7)(a) wolde dearnunga (450) 'wanted to (deceive) secretly'

+F Adv

(b) þā wæron ūtan (461) 'which were on the outside'

+F Adv

(c) þat þū meaht swā wīde (565) 'that you will be able (to see) so widely'

Aux Adv

(d) þe him ƿær forgeaf (844) 'which (Almighty God) before granted them.'

Adv +F

(e) and swā wīde gesēon (674) 'and see so widely'

Adv -F(inf)

(f) ƿellor scrīðan (773) 'pass away elsewhere'

Adv -F(inf)

(g) Hīo spræc him þicce tō (684) 'She spoke to him often'

+F Adv

(1aiii)で規定されているとおり、動詞の非定形は定形より頭韻上優位にある。2 つ以上の動詞が半行中に共起する (8) のような場合、この原則はきわめて厳密に守られていて、半行中の位置に関係なく、助動詞および定形が非定形より優位に立つ例は 1 つもない。

(8)(a) Ongōn hine þā fīnan (495) 'Then began to ask him'

+F -F(inf)

(b) "Hwæt sceal ic winnan?" cwæð hē. (278) "Why am I to toil?" said he.'

Aux -F(inf) +F

(c) wæron þā befeallene (330) 'then (they) had fallen'

Aux -F(pp)

(d) þæt hīe hæfdon gewrixled (335) 'that they had got'

Aux -F(pp)

(e) ābolgen wyrð (552) 'will be enraged'

-F(pp)Aux

(f) *habban sceoldon* (696) 'should have'

-F(inf) Aux

(1a)によれば、動詞の定形は頭韻階級がかなり低いことから、頭韻できるのは階級が最も低い機能語や本来語の副詞の一部と共に起する場合に限られる。『創世記 B』の単一頭韻の第一半行では、該当例はすべてこの原則に忠実に従っている。

(9)(a) *and þæt wiste ēac* (386) 'and also knows that'

+F Adv

(b) *hū gē hī beswicen!* (797) 'how you should deceive them!'

+F

(c) *þær pū pām ne hierde* (797) 'if you had not obeyed him'

+F

前置詞は無強勢であることから、一般に頭韻に関与することはない。しかし、(10a)のように他の無強勢語と共に起する半行では、「強弱」という半行の韻律の鑄型 (Iambic Mold) に従い、頭韻を実現する必要があることから、第一半行においてもごくまれに前置詞が頭韻に加わることもある。事実、『創世記 B』では (10a) が唯一の例となっている。一方、(10b, c) では前置詞が下線で印した目的語の代名詞と倒置し、頭韻に関わっている。これは、他の古英詩の場合と同様、前置詞が有標の位置を占めることによって頭韻の権利を与えられたとみなせる。ただし、有標の位置が必ずしも頭韻の前提とならないことは (10d) の例から明らかである。これも他の古英詩の場合と同様の特徴である。唯一の例外である (10a) を除けば、「頭韻する前置詞は有標の位置を占める」という一般化が成り立つ。もっとも、この逆は真ではない。

(10)(a) *swā him ƿæfter þȳ* (471) 'so that thereafter him'

Prep

(b) *Ac licgað mē ȳmbe* (371) 'But around me lie'

Prep

(c) *And him bī twēgin* (460) 'And by them stood two (trees)'

Prep

(d) *Hīo spræc him picce tō* (684) 'She spoke to him often'

Prep

所有代名詞は、機能は形容詞と同一であるが、語彙範疇はあくまでも代名詞であることから、頭韻上の階級は最も低い。この事実を反映して、(11) に下

線で印したように、この詩では単一頭韻の第一半行において所有代名詞は一例も頭韻していない。この特徴は第一半行の例に関する限り、*Beowulf* や *Genesis A* と全く同様である (cf. 藤原 1998:73-85)。

- (11)(a) mīnra þegna hwilc (414) 'any of my followers'

Pro N

- (b) and þīn mōdsefa (501) 'and your mind'

Pro N

- (c) incrum waldende (577) 'to your Ruler'

Pro N

- (d) þæt wit þurh uncres hēarran þanc (796) 'which we two by the favor of

Pro N N

our Lord'

最後に、一見したところ単一頭韻か二重頭韻か紛らわしい (12) のような例がこの詩には少なからずある。しかし、これまでの分析から明らかなおり、下線を施した代名詞はすべて無強勢の機能語であること、これらの語が頭韻階級が最も上位にある名詞と共に起る例において、原則 (1b) に反する例は 1 つもないこと、(1d) によって二重頭韻の可能性もないことから判断すると、これらの語の頭子音はたまたま頭韻語の頭子音と一致しているにすぎないと言える。

- (12)(a) þæt sceolde unc 2Ādame (387) 'that we two Adam should'

Aux Pro N

- (b) tō incre 2andsware (557) 'at your answer'

Pro N

- (c) wæs him on helpe (702) 'was a help to him'

+F Pro N

- (d) and mid handum his (748) 'and with His hands'

N Pro

- (e) þæt wit waldendes (798) 'so that we two of the Ruler'

Pro N

1. 3. まとめ

『創世記 B』の場合、他の古英詩の場合と比べて、単一頭韻の第一半行では頭韻階級の原則はかなり忠実に守られていて、例外の数はかなり少ない。伝統

的韻律論では例外的な解釈を施さねばならない(4e)のような例においても、原則は忠実に守られている。

1. 4. 『創世記 B』の第二半行における頭韻語の選択

『創世記 B』の場合、不完全行 1 例(441 行)、第二半行が欠落した 1 例(703 行)、頭韻が成立しない 2 例(238 行、249 行)を除くと、613 例の第二半行が分析の対象となる。単一頭韻の第一半行の場合と大きく異なるのは、大半の例において動詞が用いられていること、定形+非定形の例よりも非定形+定形の例が圧倒的に多いこと、副詞と動詞が共起する例が多いこと、頭韻階級の原則を逸脱する例が多いことなどである。

たいていの場合、原則(1)は忠実に守られていることから、その詳細は省くことにして、この節では原則が破られる例について考察したい。最初に、頭韻階級が最も上位にある名詞または形容詞が優先されない例をとりあげる。(13)の例は(13a)以外はいずれも第一半行では生じない全くの例外であるとみなせる。ただし、該当例は第二半行全体で 8 例に限られており、多くの作詩上の制約が課せられる第二半行の特殊性および他の古英詩の第二半行での該当例と比較すると、この数はかなり少ないと評価できる。

(13)(a) *stōd his handgeweorc* (241) 'The creature of His lived'

+F N

(b) *Ǻnnan brēostum* (715) 'in his heart'

Prep N

(c) *hēr on worulde* (474) 'here in the world'

Adv N

(d) *ƿeallenga sweart* (477) 'entirely dark'

Adv A

(e) *feollon ƿā ufon of heofnum* (306) 'then from heaven fell down'

+F Adv N

(f) *ƿīnum hēaran* (506) 'your Lord'

Pro N

次に、(14)のような例については、例外であるとの結論を下す前に慎重な検討を要する。すなわち、(14a)の *ealle* 'all' の場合、他の古英詩においても品詞と用法の同定が容易でない例が多いこと、(14b)の *bēgen* (または *bā*, *bū* 'both') は機能はともかく、語彙範疇は代名詞ではない可能性があること、(14c,

d) の *wiht* ‘at all’, と *fyrnum* ‘very’ の場合、用法は副詞であっても、語彙範疇は、語形から判断して名詞である可能性が高いこと、(14e) の *ǣnig* ‘any’ は all と同様の問題を抱えていることなどを考慮すると、より多くの例を対象に分析した上で結論を下さねばならない。ここでは問題提起をするに止める。

(14)(a) *Hycgað his ealle* (432) ‘Consider all this’

+F A

(b) *sægde bēgra þanc* (725) ‘gave thanks for both’

+F Pro N

(c) *Nis mē wihtæ þearf* (278) ‘There’s no need for me at all’

+F Adv N

(d) *se byð fyrnum ceald* (809) ‘which is very cold’

+F Adv A

(e) *Ǧænig tācen* (540) ‘any sign’

Pro N

名詞または形容詞を含まない半行の場合、頭韻はすべて (1b, c) に従って実現していて、例外は (15) の 1 例に止まる。したがって、他の古英詩の場合とは異なり、この種の第二半行でも頭韻階級の原則はかなり忠実に守られていることになる。ちなみに、この場合、本来なら *hine* ‘Him’ ではなく *bædon* ‘asked’ が頭韻することになる。

(15) *and hine bædon* (780) ‘and asked Him’

Pro +F

次に、説明不可能な (16) の例を 1 つ付け加えておかねばならない。この場合、(1c) に従って *godes* ‘God’s’ が頭韻に加わるべきであるが、次の *hyldo* ‘favor’ が優先していて、明らかに原則を逸脱している。これは単純な例外として処理せねばならない数少ない例である。

(16) *þe ær godes hyldo gelæston* (321) ‘who formerly carried God’s favor’

Adv N N +F

1. 2. で指摘したとおり、この詩の第二半行では副詞と動詞が多く用いられていることから、原則 (1) の破格が許容され易い第二半行とはいえ、副詞と動詞、および副詞と副詞の頭韻上の優劣に関して興味深い事実が指摘できる可能性がある。まず第一に、(17) のような例から明らかになることは、*lange* ‘long’, *symle* ‘always’, *wīde* ‘far and wide’, *heonon* ‘from here’ などの派生副詞は、*wile* ‘will’, *mōste* ‘could’, *meahte* ‘could’, *mæg* ‘can’, *þenceð* ‘thinks’ などの

助動詞および定動詞より頭韻上優位にあり、(1a, b) に忠実に従っていることである。

- (17)(a) *Mid þām hē wile ƿeft gesettan* (396) ‘With it He will again set up’

Aux Adv -F(inf)

- (b) *þas þe hē him þenceð lange nīotan* (401) ‘which He thinks long to

+F Adv -F(inf)

enjoy’

- (c) *Þā meahte hēo wīde gesēon* (600) ‘Then she could see far and wide’

Aux Adv -F(inf)

一方、該当例は少ないものの、(18a~c) のような例からは、*hēr* ‘here’ や *nū* ‘now’ のような本来語の副詞は動詞の定形と非定形のいずれにも劣るということ、したがって、これらの副詞は (1aiv) に属するということが分かる。一方、(18d~f) のように 2 つの副詞が共起し、左側の副詞が頭韻する例からも、本来語の副詞は派生副詞に劣るという (1a) の原則が忠実に守られているという指摘ができる。

- (18)(a) *and mē hēr stondan hēt* (525) ‘and bade me stay here’

Adv -F(inf) +F

- (b) *þæt hē þe hēr worhte tō mē* (817) ‘that He created you here for me’

Adv +F

- (c) *Swā mē nū hrēowan mæg* (819) ‘So now I may regret’

Adv -F(inf) Aux

- (d) *þæs wē hēr ƿinne magon* (436) ‘what we can here in’

Adv Adv Aux

- (e) *and þone full hearde geband* (444) ‘and bound it very tightly’

Adv Adv +F

- (f) *ne þæt nū fyrr ne wæs* (498) ‘now it was not long’

Adv Adv +F

しかしながら、(18d~f) と同様に 2 つの副詞が共起していても、左側の副詞が頭韻する (19) のような例の場合、左側の副詞の方が階級が上であると言っても、右側の副詞が左側の副詞より階級が低いとは必ずしも言えない。なぜなら、2 つの副詞が同じ階級にある可能性を否定できないからである。いずれにせよ、原則 (1a) が忠実に守られていることに変わりがない。

- (19)(a) *ƿungemet lange* (313) ‘immeasurably long’

- (b) *Ʒæfter siððan* (550) 'ever afterwards'
 (c) *hē Ʒeasten hider* (555) 'he (sends) hither from the east'
 (d) *westan oððe ēastan* (806) 'from west or east'
 (e) *heonone nū Ʒā* (831) 'then now from here'

古英語の *self* は単独で用いられ、形容詞または代名詞としての機能を果たす。しかし、このことは *self* の語彙範疇もまた形容詞か代名詞であるということにはならない。古英語のような屈折言語においては、語の機能と範疇は必ずしも一致するとは限らない。『創世記 B』の場合、*self* は第二半行で 7 回用いられているが、(20) の頭韻例から判断できることは、*self* が助動詞はもとより動詞の定形および非定形のいずれにも勝り、名詞と対等の頭韻階級に属しているということである。この特徴は他の古英詩の場合と同一であることから、当時の詩人は *self* の語彙範疇は代名詞と同等とみなしていなかったと主張できる。ちなみに、*self* には強意の機能があることから強勢語と同様に頭韻に加わるという解釈は、同じく強意語でありながら *ful*, *wel* などの語は頭韻しないことから、受入れがたい。

- (20)(a) *Ic wāt hwæt ne me self beþeād* (535) 'I know what He Himself bade me'
 +F +F
 (b) *Nū sceal hē sylf fāran* (556) 'Now He Himself shall come'
 Aux -F(inf)
 (c) *bīdan selfes gesceapu* (842) 'to wait the decrees of Himself'
 -F(inf) N
 (d) *and selfes stōl* (566) 'and the throne of Himself'
 N

第二半行においても (21a, b) のように前置詞が目的語と倒置する例が見られるが、倒置が必ずしも頭韻の条件となっていないことは (21c~f) の例からも明らかであり、これはすでに指摘したとおり第一半行の場合と同一の特徴である。

- (21)(a) *lō onsende* (541) 'sent to (me)'
 Prep +F
 (b) *Ʒymbe hweorfan* (669) 'move around (Him)'
 Prep -F(inf)
 (c) *Nū scīneð þē lēoht fore* (614) 'Now light shines after you'
 +F N Prep

(d) *helle tōmiddes* (324) 'in the midst of hell'

N Prep

(e) *and him ƿoft betūh* (766) 'and often between them'

Adv Prep

(f) *Nys unc wuht beforan* (812) 'There is nothing before us'

+F N Prep

すでに記したとおり、第一半行の場合、代名詞が関与する例を除けば、単一頭韻か二重頭韻か紛らわしい例は一切存在しない。一方、第二半行の場合、いずれの古英詩においても二重頭韻は生じない。しかし、『創世記 B』の場合、代名詞の例をすべて除外しても、二重頭韻の可能性が残る例は 27 もある。この数は他の古英詩の場合と比べてかなり多いことから、綿密な検討に値する。

最初に、疑わしい動詞のうち、be 動詞 (3 例) およびこれに相当する *weorðan* (4 例)、助動詞の *habban* (6 例)、および法助動詞 *mæg* (1 例) については、名詞や形容詞と共に起する場合、原則 (1b) の制約があることから、第一半行はもとより、第二半行においても頭韻の可能性は低いことから、分析対象からは除外する。そこで、残った動詞についてこれから検討することになる。

(22)に示したように、下線部の動詞はいずれも後続の頭韻語 (名詞、形容詞、派生副詞) と頭子音が一致している。同一階級に属する語であれば、原則 (1) に従って左に位置する動詞に頭韻の優先権がある。しかし、該当例ではすべて後続の語の方が頭韻階級が勝っていることから、ここでは原則 (1b) に従い、階級が上の右側の語が頭韻しているとみなす。その根拠は、すでに述べたとおり、きわめて多くの正常な第二半行において、名詞・形容詞・派生副詞と共に起する動詞の定形および非定形が頭韻に関与する例が『創世記 B』では稀であることに依る。このように、『創世記 B』には一見紛らわしい例が多く存在するが、このことは、とりもなおさず、詩人が原則 (1) を確立した強固なものともなっている証拠である。(1b) を厳密に適用すれば、(22) のような例には全く問題がなくなってしまう。この結論に従うと、この詩は第二半行においても他の古英詩よりもはるかに原則 (1) に忠実であることになる。

(22)(a) *Hē lēt hēo ƿat land būan* (239) 'He let them dwell in that land'

+F N -F(inf)

(b) *ponne læte hē his hine lange wealdan* (258) 'then He let him have

+F Adv -F(inf)

power over it for long'

- (c) “Ic wāt, inc waldend god (551) “‘I know, the ruling God at you two’

+F N N

- (d)
- Gesyhst
- þū nū þā sweartan helle (792) ‘Do you now see the dark hell’

+F A N

- (e) and
- habban
- his
- hyldo*
- forð (625) ‘and (shall) have His favor’

-F(inf) N Adv

次に、*ær*, *full*, *læs*, *siððan*, *swā* などの副詞は、これまでの分析からも明らか
なとおり、名詞や形容詞と共に起する場合、ごく稀な例を除いていずれも頭韻し
ない。それゆえ、(23) のような例においても、下線を施した副詞は頭子音は
頭韻語と同一であるが、(1c) に従って頭韻していないとみなせる。なお、(23a)
の *æne* ‘one’ は数詞 *ān* の単数・対格・男性形であるが、他の 2 例 (370a,
395a)においても、名詞、形容詞および非定形と共に起する場合、頭韻には加わ
っていないことから、語彙範疇としては代名詞と同等にみなされている可能性
が強い。

- (23)(a)
- æne hæfde hē swā swiðne geworhtne*
- (252) ‘He had created one so

Num Aux A -F(pp)

strong’

- (b)
- þe ær wæs fengla scýnost*
- (338) ‘who once was the most beautiful of

+F N A

angels’

- (c)
- Siððan
- ic mē sefte mæg (433) ‘Afterwards I shall be able to (rest)

Adv Aux

more comfortably’

- (d)
- wæs sē fēond full nēah*
- (688) ‘the fiend was very near’

+F N A

- (e)
- þy læs gýt lāð gode*
- (576) ‘lest you two hateful to God’

Adv A N

1. 5. まとめ

第二半行は第一半行に比べてきびしい頭韻の制約が課せられていることか
ら、原則 (1) を逸脱しやすい。『創世記 B』にも (1) の例外となる半行はあ
るものの、その数は他の古英詩と比べるとかなり少ない。とりわけ、所有代名
詞の頭韻例が皆無であることがこの詩の大きな特徴となっている。なお、第二

半行では副詞や動詞が用いられている例が第一半行よりかなり多いが、これは第二半行の末尾、すなわち長行の終りが統語上の区切りに対応する場合が多いことに基づくようである。なお、副詞が多く用いられているのは動詞の数に対応しているのみならず、やはり頭韻の必要をまかなうことが最大の理由であろう。なお、-F +F の語順、とりわけ、本動詞—助動詞の語順が第二半行にかなり多いが、これはこの半行には従属節が多く用いられているせいであると考えられる。

II. 『創世記 B』の二重頭韻の第一半行における頭韻語の選択

2. 1. 二重頭韻の半行における頭韻語の選択

二重頭韻の半行において、頭韻語の選択に問題が生じるのは、主強勢語が 3 つ以上含まれる場合だけであり、詩人が (1b, c) に従うか、それとも (1d) の許容に依存するかが焦点となる。

最初に、頭韻階級の最上位にある名詞・形容詞が 3 つ以上半行中に含まれる例について考察する。この種の半行は伝統的韻律論では拡大半行と呼ばれ、例外的な韻律解釈が施されてきた。しかし、本稿で分析枠として用いた頭韻階級の原則からすると、原則 (1b, c) に忠実な例がほとんどであることは、頭韻の有無に基づくリズムを主体とした韻律の枠組みが正当なものであることを裏付けている。まず第一に、この種の半行の多くは (24a~c) に示したように、原則 (1c) に従って頭韻が実現している。(1c) に反するのは (24d, e) の 2 例であるが、これは他の古英詩の場合とまったく同様、eall ‘all’ の語彙範疇ではなく、機能に基づくものであることから、本稿では ān や ænig と同様、総称的な (generic) 語に共通の現象と捉え、例外とはみなさない。

(24)(a) wið þone hēhstan heofnes waldend (260) ‘against the highest ruler of

A N N

heaven’

(b) brand and brāde fīgas (325) ‘fire and spreading flame’

N A N

(c) monnum mid morðes cwealme (758) ‘to men by the pain of death’

N N N

(d) ealra morðra mǣst (297) ‘greatest of all punishments’

A N A

(e) and eall þēos woruld wlitigre (604) ‘and all this world more beautiful’

A N A

(25) の 4 例は綿密な検討を要すると思われる。すなわち、名詞・形容詞が 3 つ以上共起しているが、(1c) に反して 2 番目の名詞は頭韻しない。このうち、(25a) については、Doane(1991:214) は *godes* までを第一半行、それ以降を第二半行とみなす校訂案を示していて、この解釈に従えばまったく問題が生じない。他の 3 例については Krapp(1931) も Doane(1991) も何ら言及していないことから、校訂上の問題はなさそうである。たまたま 3 つ目の名詞または形容詞の頭子音が最初の名詞の頭子音と一致したと考えれば問題はなくなるが、ここでは例外としておく。

(25)(a) þæt wē mihtes *godes* *mōd* onwācen (403) ‘so that we may weaken the

A N N +F

mind of mighty God’

(b) *heofona rīce* mid hluttrum saulum (397) ‘the kingdom of heaven with

N N A N

pure minds’

(c) *fira bearn* on þissum fæstum clomme (408) ‘the sons of men, in these

N N A N

firm fetters’

(d) *godes engel gōd* (657) ‘the good angel of God’

N N A

次に、(26) の 3 例の場合、(26a) については (25b~d) と類似の解釈が全く不可能ではないと思われる。すなわち、たまたま 3 つ目の名詞の頭子音が先行する 2 つの頭韻語の場合と一致しているにすぎず、詩人が三重頭韻を意図したのではないという解釈である。一方、(26b) については、*hæbbe* は定形であるが、本動詞であること、副詞 *hēr* ‘here’ は頭韻の可能性が低いことから、*hēr* の頭子音がたまたま一致していると解釈するのが妥当であろう。(26c) の場合、最初の複合語は 2 つの構成素とも頭子音が一致しているが、この種の二重頭韻の例はこの詩では他に例が全くないことから、偶然の一致とみなし、三重頭韻の可能性を否定する。ちなみに、この詩の規模から判断すると、このような二重頭韻が実現している複合語が何例か用いられていて当然であるが、1 例のみ、しかも偶然の一致の可能性が高いことは、詩人がこの種の複合語を二重頭韻に活用していなかった可能性につながり、他の古英詩の場合との比較という点で

興味深い。たとえば、『創世記 B』とほぼ同じ規模である『不死鳥』(*The Phoenix*) は 677 行から成るが、二重頭韻が実現している複合語は 8 例 (*winter-ge-weorp* (57a) ‘winter storm’, *will-wonge* (89a) ‘delightful plain’, *heofum-hrōfre* (173a) ‘vault of heaven’, *winter-ge-wædum* (250a) ‘garment of winter’, *blēo-brygdum* (292a) ‘variety of colors’, *dēað-dēne* (416a) ‘valley of death’, *woruld-welan* (480a) ‘worldly possession’, *forht-ā-færed* (525a) ‘terrified’) 用いられている。

『創世記 B』の約半分の長さ(350 行)から成る『ユデト』(*Judith*)でさえ 3 例 (*swyrd-ge-swing* (240a) ‘sword-stroke’, *fyrn-ge-flitu* (264a) ‘ancient quarrel’, *gold-gifan* (279a) ‘gold-giver’) が用いられている。

(26)(a) *hēah heofona gehlidu* (584) ‘the high vault of heaven’

A N N

(b) *Nū hæbbe ic his hēr on handa* (678) ‘Now, I have it here in my hand’

+F Adv N

(c) *hæleð-helm on hēafod āsette* (444) ‘(he) put on a helmet on his head’

N N +F

次に、頭韻階級が上位にある語と助動詞が共起する (27) のような二重頭韻の半行の場合、単一頭韻の半行の場合と同様、(1b) はきわめて忠実に守られていて、これらの助動詞が名詞・形容詞・非定形動詞に優先して頭韻することを許容する (1d) に従う例は 1 つもない。

(27)(a) *dȳran sceolde hē his drēamas on heofonum* (257) ‘he should hold His joys in heaven’

-F(inf) Aux N N

(b) *Dēore wæs hē drihtne ūrum* (261) ‘He was loved by our Lord’

A Aux N

(c) *gram wearð him sē gōða on his mōde* (302) ‘the Righteous One was

A Aux A N

angry at him in His heart’

(d) *hæfst þē wið drihten dyrne geworhtne* (507) ‘have made yourself dear

Aux N A -F(pp)

to God’

一方、本動詞の場合、まず、定形は (28a, b) のような頭韻例と、(28c, d) のような非頭韻例がほぼ同数となっている。このことは、詩人が常に (1b) に忠実であるとは限らず、(1d) の許容を受け入れて、頭韻の必要をまかなってい

る結果であると考えられる。

- (28)(a) hēt þat þū þisses ƿofætes ƿæte (500) ‘(He) bade that you should eat
+F N +F
this fruit’
- (b) þæs lēanes þe hē him on þām lēohte gescerede (258) ‘the reward that
N N +F
He had granted him in heaven’
- (c) rīdeð racentan sāl (372) ‘the loop of chains rides (on me)’
+F N N
- (d) Ac ðoliap wē nū ƿrēa on helle (389) ‘But now in hell we suffer
+F N N
affliction’

一方、本動詞の非定形の場合、(29a, b) の 2 例については半行の左寄りに位置するにもかかわらず頭韻していないが、これは (1b) に従った結果であり、名詞が非定形より優位にあることの証拠ともなっている。しかし、これら 2 例以外の例ではすべて (29c~e) のように半行の最も左よりの非定形が三番目の強勢語の名詞・形容詞に優先して頭韻していることから、詩人は止むを得ず (1d) の許容に従っていることが分かる。

- (29)(a) bētan heora hēarran hearmcwide (625) ‘amend to their Lord for
-F(inf) N N
injurious speech’
- (b) sēcan helle gehliðo (764) ‘seek the doors of hell’
-F(inf) N N
- (c) forswāpen on þas swearten mistas (391) ‘driven off to these dark mists’
-F(pp) A N
- (d) weallan wyrmes geþeabt (590) ‘the serpent’s suggestion (began to)
-F(inf) N N
well up’
- (e) hæft mid hringa gesponne (762) ‘bound with chain of rings’
-F(pp) N N

所有代名詞は (30) に示したように二重頭韻の半行においてもかなり多く用いられているが、半行中の位置を問わず頭韻する例は一つもないことから、所有代名詞を徹底的に頭韻から避けるという詩人の判断がここでも強く表れて

いて、この詩が他の古英詩とは大きく異なる特徴の1つとなっている。

(30)(a) *purh mīnne cime cræfta* (618) 'through the power of my coming'

PPro N N

(b) *on bīnum hyge hrēowan* (826) 'regret in your mind'

PPro N -F (inf)

(c) *læst mīna lāra* (619) 'carries out my advice'

+F PPro N

(d) *þæt hē bīne lāre læste* (576) 'so that he may carry out your counsel'

PProN +F

(e) *hēr mid handum sīnum* (540) 'here with His arms'

Adv N PPro

2. 2. まとめ

二重頭韻の半行においても『創世記 B』の詩人は他の古英詩人よりはるかに原則(1)に忠実であり、伝統的韻律論では例外的な解釈を施さざるを得ない見かけは長い半行の場合でも、原則に反するのはわずか3例に止まる。

全体のまとめ

『創世記 B』は *Beowulf* のような叙事詩、*Genesis A* のような宗教詩と比べると頭韻階級の原則にはるかに忠実であり、第一半行はもとより、第二半行においても、原則(1b, c)を逸脱することを許容する(1d)の使用も最小限度に止めようとしていたことが今回の分析によって明らかとなった。今後、サクソン語の『創世記』についても同様の分析が行われれば、両者の比較を始めとして、興味深ささまざまな事実の指摘が可能となり、ゲルマン古詩の韻律研究に大きく貢献できるものと思われる。

参考文献

- Doane, Alger N. (ed.) 1991. *The Saxon Genesis*. Wisconsin & London: The University of Wisconsin Press.
- Fujiwara, Yasuaki. (藤原保明) 1991. 『古英詩韻律研究』 広島, 溪水社.
- _____. 1998. 「古英語の所有代名詞の言語特性」『言語文化論集』第48号. 73-85.
- Krapp, George Philip. (ed.) 1931. *The Anglo-Saxon Poetic Records*. Vol. 1. New

York: Columbia University Press.

Sievers, Eduard. 1887. 'Zur Rythmik des germanischen Alliterationsvers, III: Der angelsächsische Schwellvers.' *PBB*. 1. 454-482.

この研究は平成 14 年度科学研究費補助金（（基盤研究（C）（2））、研究題目：ゲルマン語の造語法の普遍性と特殊性に関する通時的・比較言語学的研究、研究代表者：藤原保明）の交付を受けて進められている研究成果の一部である。